

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

平成28年 3月11日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会長 辻井昭雄様

所属部局・研究科 医学部附属病院臨床研究総合センター

職名・学年 特定研究員

氏名 成田慶一

助成の種類	平成27年度 ・ 研究成果公開支援 ・ 研究成果物刊行助成		
研究成果物名	自己愛のトランスレーショナル・リサーチ		
著者・編著、作成者全員の所属・職・氏名	京都大学医学部附属病院 特定研究員 成田慶一		
学術書・論文集等について	出版社・印刷会社等名	発行年月日	配布先
	創元社	平成28年2月29日	市販
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。合わせて、刊行・作成された研究成果物をご提出(ご提示)下さい。		
会計報告	事業に要した経費総額	1,809,093 円	
	うち当財団からの助成額	1,000,000 円	
	その他の資金の出所	(機関や資金の名称) なし	
	経費の内訳と助成金の使途について		
	費目	金額 (円)	財団助成充当額 (円)
	組版代	854,000	500,000
	製版代	191,500	100,000
	刷版代	112,500	100,000
	印刷代	165,000	100,000
	用紙代	196,417	100,000
製本代	155,670	100,000	
(消費税)	134,006		
合計	1,809,093	1,000,000	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 学術出版事情が非常に厳しい中で、出版社の企画会議は通過したものの、助成金の獲得が出版の条件になっていたものでした。貴財団の助成によって、緩和医療、混合研究法、臨床心理学の領域にまたがる本書が出版されたことは、文字通り「ありがたい」ことです。改めて感謝申し上げます。		

【本書刊行の目的】

自己愛／ナルシシズムという概念は、およそ 100 年前にフロイトが理論的に導入して以来、精神病理やパーソナリティのみならず、社会的風潮を形容する表現としても用いられてきた。その後、2013 年に公開された米国精神医学会の診断マニュアル DSM5 の策定過程において、自己愛／ナルシシズムに関する非常に活発な議論が行われたことを見ても、この概念に委ねられている心理的事象は今なお現代の臨床家・研究者の関心を惹くところであることが明らかである。しかしながら自己愛に関する実証的基礎研究と臨床的実践研究の間には、容易には埋められない本質的な乖離が存在することがしばしば指摘されてきた。そこで本書では方法論的構造と内容的連続性を考慮して章構成を行い、基礎研究から臨床実践までの 11 の研究を連続呈示することで、その乖離に対して一冊の学術書ならではの「橋を架けること(translation)」を目的としている。

【自己愛／ナルシシズム概念の整理】

第 I 章では、ナルシシズムおよび自己愛をめぐる先行研究を概観し、自己愛という訳語の問題を含め、これらを論じる上での重要な論点を整理した。特にここでは、フロイト、コフート、ユング派であるヤコービ、ストーン、ノージックの論じた「公正さ (fairness)」に注目している。また、臨床的・文化的観点としてギャバードを筆頭に多くの臨床家が提唱する「顕在・誇大型」と「潜在・過敏型」のナルシシズムについて、診断基準の項目の歴史的変遷を含めて整理した。

【自己愛研究における方法論の導入について】

本書の第 II 章から第 IV 章は混合研究法という方法論的構造によって組み立てられている。この構造は本書を自己愛に関する包括的な研究とするために必要なものであった。この構造における重要なポイントは第 III 章の観察研究である。この観察研究デザイン自体が、量的アプローチと質的アプローチの混合研究法という性質を持っており、なおかつ本書全体においては第 II 章と第 IV 章を橋渡す研究 (translational research) として機能しているという構造になっている。そのような構造で、「静的」な自己愛と「動的」な自己愛を論じることで初めて、質問紙によって量的に変換されたデータと、医師と患者の対話場面における実態としての行動や力動との関連を検討することが可能になり、また臨床事例についての考察の視座を共有可能性のあるものとして提示することができたと思われる。「実証的」研究によって算出される、「仮想空間 (cyberspace) における最適解」は、「臨床的」な現場である体験世界 (real world) に持ち込まれてこそ活かされるものであろう。極めて多様な現象を取り扱う自己愛研究であればこそ、このような研究デザインや方法論が今後さらに洗練され、基礎的研究と臨床的研究が有機

的に結びついていくことを期待したい。

【神経科学との接合】

第Ⅱ章では、複数の実証的研究が取り上げられているが、特に注目されるべき点は、自己愛研究が神経科学との接合への一步を踏み出したことである。本章では、近年世界中で注目され、多数の言語に翻訳されている、感情神経科学の基本感情理論（Panksepp, 2012）を踏まえたパーソナリティ尺度（ANPS）の邦訳版を作成した。次に、神経科学の理論モデルと整合性のある心理統計学のモデルを構築し、ANPSデータの適合について精緻な検討を行った。その結果、自己愛はドーパミン神経系との強い関連が示唆され、これまでの自己愛論を神経科学的な視座から整理しなおすことの可能性が開かれた。

【インフォームド・コンセントに表れる自己愛】

第Ⅲ章では、対人関係の中で表現されるダイナミックな自己愛の問題を論じるために、抗がん治療としての外来化学療法に関するインフォームド・コンセント（IC）という医療場面をフィールドとした観察研究を行った。質問紙データと精緻な逐語記録から、ICという医療場面においてはどのように自己愛の問題が現象するのかについて誇大型のエピソード・過敏型のエピソード・成熟志向性をもつエピソードの3つの類型にまとめて示し、それらへの医師の対応の在り方を含めて統合的な解釈を示した。

【医療場面における心理援助】

第Ⅳ章では、自己愛の問題についての理解がどのように医療場面の心理援助に応用されるのかを論じた。急性期から終末期に至るまでの各事例が示すのは、個人の存在そのものの意味が大きく揺るがされ、世界との関係の見直しを請求に迫られる医療という場でこそ、自己愛という人間の生にとって中核的かつ全体性と結びついている概念が生きてくるということであった。

【まとめ】

以上のように自己愛は、感情・意思決定から人生の意義に至るまで人間の在り方全体に関わるものであることが、本書では広角で複合的な方法論と切り口で論じられた。